

追悼

青木昌彦教授

比較制度分析への道

## 実務の世界からみた青木昌彦の「制度」観

山形 浩生

Yamagata Hiroo

評論家・翻訳家・ODAコンサルタント

青木昌彦といえば制度となる。さて制度というの、だれもが制約を受けるものだが、実際にそれを意識する場面というのは、一般の実務ではそんなにない。もちろん法を含め各種制度に行動が左右されているのは事実だし、それにあわせて企業内外の仕組みも創られている。また法規制を自社に有利に運ぶようあれこれ画策する場面はあるでも通常は、日常のビジネスは、いわばプライステーカーならぬ制度テイクカーとなる。

が、そうでない業界がある。開発援助の業界だ。

### 1 90年代開発援助における「制度」

開発援助の世界では、ウィリアム・イースタリーが大いに批判する点ではあるが、各種プランナーの処方箋により途上国を発展させようとする。そして、その処方箋の中には、行政制度や法規制整備の支援など、制度に関わる部分も大量にある。そして特に1990年代

から2000年代にかけてやたらに重視されたのが、制度だった。援助の成果が必ずしも大きくないのは、個別に港がないとか教育が足りないとかのせいではなく、むしろ発展を阻害するような制度ができていないのだ！ このお題目が、何とかの一つ覚えのように繰り返されていた。

その背景には、世界銀行の方針があった。いまも昔も世界銀行は、貧困削減こそ至上という立場だが、当時は貧困削減と経済発展とが相反するかのような立場が採用されていた。だから経済発展に資する箱ものには援助しない、インフラ整備はそこから利益を得る民間でやればよくて、そのためには民間の市場が機能できるような制度づくりさえできていけばいいはずだから、その部分だけは世界銀行が援助する、というのが基本路線となっていた。もちろん、これはかなり実際の状況を簡略化している。が、現場での印象はまさにこういうものだったし、実際の方針ともそんなに乖離していないと個人的には思う。

トル(?)  
?  
個別の  
要因の

が、制度とは？ それは法規制のことか？ それもある。組織的な問題か？ それもある。文化も教育も、とにかく市場経済を阻害するもの（または促進するもの）すべて。うーん。そのくせ、具体的な対応というのは決まっていた。電力部門では、発送配電を分離して、発電と配電は完全に民営化せよ。電力価格については、第三者の監督機関を設けつつ自由化を。

トレ？  
モしくは、  
送電、  
入れる？

なぜそんなことをしなければいけないのか？ それは制度が重要だから。その制度というのは、こんなに何もかも一変させないといけないのか？ その通り。個別にやっていたはらちがあかないからこれを進めるべきなのだ、というのが方針となる。

世界銀行はやはり援助の世界では理論的にもイデオロギー的にも大きな存在だし、各種援助機関もばらばらに援助をするわけにはいかないで、どうしても世界銀行の方針には引きずられるのだ。援助の現場の人間は、非常に後ろめたい思いをしつつ、自国ですらろくすっぽ進んでいない構造改革の必要性を唱えさせられた。

そしてもちろん、そんな大がかりな話がすぐに進むわけもない。そしてもちろんあちこちで膠着状態。だから当時のほくにとっては、制度というのは確実に仕事が進まなくなる符牒のような、呪わしい言葉だった。

## 2 青木昌彦の「制度」観

青木先生とはちょうどその頃、2004年あたりの朝日新聞の書評委員会でごいっしょすることになったのだった。もちろんご多忙だったので委員会の会議そのものへの出席は少なかったし、またその際も、口をきく相手ときかない相手とがきわめて明確に分かれていた。

ほくはなぜか、口をきいてもらえる側の人間だった。当時ちょうど、フリーソフト関連の文献やレッスンの翻訳などでインターネット上での規制などについてご関心があったせいもあるのだろう。

だがその一方で、ほくにとっては青木昌彦といえば、あの呪わしい「制度」の頭領格でもあった。日本企業やアジアの経済発展の分析は読んでいて、感銘も受けていた。制度、というのをきちんと定義すれば、それなりに重要な意味合いを持つことはわかる。その一方で、なんでもかんでも制度では何も言っていないに等しいだろうに、どう責任を取ってくれるんだ……とまではいかないが、少なくともその現状についての考えくらいは聴きたいとずっと思っていたものの、そんなに長い話をする時間もなく、それをようやく聴けたのが書評委員会の忘年会だったはず。

で、おそろおそろ上のような話をしてみたのだけれど、もちろんかなり怒られるんじゃないかと予想していた。制度の改革がきちんと取り組むべき課題なのはまちがいない、自分のプロジェクトがやりにくいか近視眼的なことではケチをつけてはいけない、というような。

ところがいきなり青木先生は「そう、その通り！」とおっしゃったので、えらく面食らったのを覚えている。いまの世界銀行での「制度」は安易に使われすぎていて、ほとんど無意味になってしまっている、なんでも制度

？  
ほくは  
発言して  
いて、  
それらに

？  
訊

### 著者紹介

1964年生まれ。東京大学都市工学科修士課程およびMIT不動産センター修士課程修了。大手調査会社に勤務、途上国援助業務のかたわら、翻訳および執筆活動を行う。著書：「[お金]って、何だろう？」(共著、光文社新書、2014年)ほか。訳書：トマ・ピケティ「21世紀の資本」(共訳、みすず書房、2014年)ほか。

と言って括ればいいというものではない、制度はその社会で発生してきた理由があるんだし、それを無視して外から画一的な構造改革などを押しつけてもダメであり、それで制度ができあがるほど甘くない！そして最後には、制度というものをもっときちんと理論化して、ああいう野放図な使われ方ができないようにしてやるんだ、と力説。

なーんだ、じゃあぼくが感じていたことは、基本まちがってはいなかったのね。

考えてみれば、そうした制度のとらえ方は、それまでに読んでいた『システムとしての日本企業』（青木・ドーア 1995）や『東アジアの経済発展と政府の役割』（青木・金・奥野 1997）などでもちゃんと出ていた考え方であり、当然の反応だったともいえる。

一方で経済開発において制度が（どんな形であれ）メインストリーム化してきたことは、ある意味で青木先生の業績の反映でもある。当時、インターネット上で活発な議論が行われていた掲示板で青木昌彦の話題を出したところ、「青木昌彦はもう新しいことなどでできず、すでにノーベル賞目当てで守りに入っている」というコメントがついたので、援助業界での制度流行批判も、嫌がられるのではとも思っていた。まったくの杞憂。

### 3 その後の青木昌彦：理論、現実、仮想世界

それどころか、その後も青木昌彦は守りに入る様子などは一向に見せなかった。書評委員を満期退任してからも、一つは、理論モデル的な方向性。ゲーム理論における枠組み設定を通じた制度の形式化だ。さらには、特に中国経済を中心とした現実世界における制度の発展と社会経済環境とのつながり。そして

もう一つは、インターネットを中心とした、制度のないところにどのような制度を作る（または自然に生まれる）のか。理論と現実と仮想の三方向から、制度の包囲網を少しずつせばめつつあった感じだ。ご自分でやっていたものもあるし、また他の研究者を引き込んで進めていたものもある（特にインターネット系の部分）。鈴木健『なめらかな社会とその敵』（鈴木 2013）やヒース『ルールに従う』（ヒース 2013）など、全然ちがう領域の話だと思っていたものが、どちらも青木先生の関係しているもので、なんだか手のひらの中で踊らされているような気分になったものだ。

中でも中国については、当然ながら多くのビジネス面でも将来動向が非常に注目されており、その動向を左右するのが中国の今後の制度的な展開だというのはだれもが認めるところ。これに関連したレポートを書くのに、青木昌彦の関連文献を使わせてもらったことも何度かある。

その分析の粒度は、すぐに工場進出／撤退を決めるのに使えるようなものではない。社会経済の中で、明らかに無理がきている部分があり、それを解消するためになんらかの制度的な変更が生じる、という社会環境と制度の共進化の基本的な考え方はきわめて納得いくものではある。でも社会環境の無理は明確にわかる一方で、そこから次の制度発展についての見極めがつくというわけではない。

まあそれを期待すること自体が、現状では非現実的だ。それでも、ある程度の方向性が得られるだけでも、重要な示唆にはなった。

さらに最近では、援助の世界でもかつてほど制度がふりかざされることはないように思う。特に、それを口実にした構造改革要求もない。それはもちろん、あまり拘り定規に構

文  
南  
入  
れ  
ま  
し  
た

→  
→

→  
→

→  
→

### 3 その後の青木昌彦：理論、現実、仮想世界

→  
→

造改革を要求しても、何も動かないという現実的な問題が出てきたというのもある。そして形式的に構造改革を行ったところでも、現実の制度は強力だ。ある国では電力構造改革を形ばかり実施して、独立発電会社（IPP）も登場しかけたが、結局立ち消えた。その経緯を調べに行ったところ、国営電力会社の人が「NGOに金を渡して環境問題を口実にしつつく反対運動をさせ、IPP建設をつぶしてやった」と得意げに語ってくれたものだ。

また、インフラ投資の必要性も認識されてきた。かつてのように、制度構築や構造改革だけをやります、といった方針ではさすがに立ちゆかない。貧困削減も重要だけれど、ある程度の経済成長がないと貧困削減もままならないことも、だんだん認識されてきたし、そのためにはインフラは必要だ。

そして一時はPFIやPPPなどのいわゆる民活インフラ整備が大いに期待されたものの、特に1990年代末のアジア通貨危機により、民間の取れるリスクには自ずと限界があることが明らかとなり、こうした仕組みにもかなりの限界があることが明らかになった。制度だけ作れば市場が勝手にインフラを作ってくれる、というわけにはいかない。その意味で、ある程度は穏当なところに落ち着いた観はある。

#### 4 青木昌彦のやり残したこと？

ただし当然ながらそれは、制度についての分析や応用が進んだ結果、というわけでは必ずしもない。その意味で、青木先生が朝日書

評委員会の宴会で豪語したような、世界銀行の連中に制度のなんたるかをビシッと見せてやる、という状況ではない。ある意味で、それは青木昌彦のやり残したことでもある。

それはもちろん、当然だろうという気もする。真面目にやろうとしたら、社会経済環境と制度の共進化を分析した上で、それをモデル化してある社会経済変化から生じ得る、進化論でのESS的な部分均衡をもたらすような、複数の解を導き出すという、いわば準決定論的な社会経済進化の道筋を描くような話となるだろう。アイザック・アシモフの『銀河帝国の興亡／ファウンデーション』に登場する心理歴史学じゃあるまいし、それはさすがにあり得ない。

その一方で、あれだけ豪語していたのだから、ひょっとしたらあの2004年の時点で青木先生には何か思うところがあったのかもしれないという気もする。最終的な結論ではないにしても、それを見出す手法や方向性くらいは何かは。そんな大風呂敷の話もうかがっておけばよかったと、今さらながらに思うところではある。

#### 参考文献

- 青木昌彦＋金澤基＋奥野（藤原）正寛編（1997）『東アジアの経済発展と政府の役割——比較制度分析アプローチ』白鳥正喜監訳、日本経済新聞社
- 青木昌彦＋ドナルド・ドーア編（1995）『国際・学際研究システムとしての日本企業』NTTデータ通信システム科学研究所訳、NTT出版
- 鈴木健（2013）『なめらかな社会とその敵』勁草書房
- ヒース、ジョセフ（2013）『ルールに従う——社会科学の規範理論序説』瀧澤弘和訳、NTT出版

「も」が「つづく」の「で」

「？」  
↑  
「シリーズ」  
↑  
「書誌情報  
入れようかと  
思いましたが  
複数冊  
のようなので  
やめます。」